

頭目によっては、測定限界以下という値すらめずらしくない現代のアンプですが、またその間に大きな違いがあるのは、いったいなぜなのでしょう。そこでとりあえず、これはきわめて常識的に言われていることなのですが、ある信号増幅回路を決めてこれを動作させるための電源回路を何種類か用意し、音を聴いてみる、と音がまるで違うという事実、乾電池、車載用バッテリー、シリーズレギュレーター等を、スタックスではビュアクラアンプをつくりつづけていますが、ここで痛感したのは電源回路の重要性でした。その結果がCA-XやCA-Yに採用したスーパーシャント電源が違ったわけですが、それにしては依然として残る電源と回路の因果関係の謎、そして、因果関係と言えば信号回路の方でも、いわゆる音を良くする回路テクニックの数々、いわゆる、スルーレートを高くする、TIM歪を減らす、低NFB化、多重NFB、線形性の帯域を伸ばす、電源をローノイズ低インピーダンス化する等の手法のそれぞれの

因果関係、これがないはずはないのに今まで問題にされたことはありませんでした。まったく別個の問題として論議されていた感すらあります。

これらのいわば偶然としたアンプ設計の常識という概念をスタックスが実に明快に

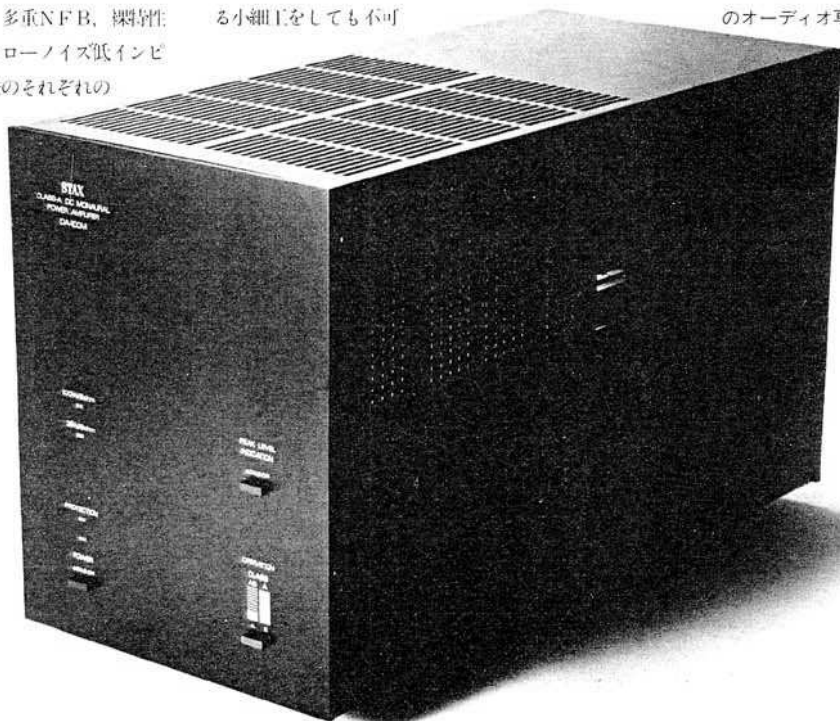
スッキリとひとつの体系としてそのそれぞれを位置づけました。そしてこれらがすべてあるひとつの目的のために使われていたテクニックであったことを発見したのです。それはこれまでのすべてのアンプが電源ノイズをパワー段に素通しし、しかも高い周波数帯では、NFBとゲインの関係でノイズの増幅率の方が音源信号のそれより大きくなってしまいう現象すら起こしているという事実、そして数々のテクニックがこの電源ノイズに対するSN比の向上に向けられたものであったことを発見したのです。この電源ノイズが筒抜けになるルートを発見し、拮抗したのがDA-100Mに採用された全段対アース増幅方式です。電源ノイズが筒抜けになるルートすなわちアンプ増幅段の内の2段目ですが、この段が電源電圧を基準とする増幅である限り、出力が電源ノイズの妨害を受ける、という宿命はいかなる小細工をしても不可

避です。スタックスDA-100Mは、この宿命を「基準を電源電圧に依存しない増幅方式」すなわち「全段 アースを基準とした対アース増幅方式」で断ち切りました。この結果は、155dBというSN比に表われています。これはつまりMCヘッドアンプとしても使えるという値でもあります。私たちはこのDA-100Mをもって、史上のすべてのアンプに挑戦します。

その他の特長

- 純A級100Wの他、純A級範囲25WのAB級切替可能。
- 左右のアンプを高周波領域のみ結合させて動作を安定化する専用アースケーブルを付属。
- 初段にスーパーシャント電源採用。
- ローノイズファーストリカバリーダイオードをバラ使用。
- リングエミッターパワートランジスター採用。
- 800VAトロードバルパワートランス使用。
- 合計 88,000μF

- のオーディオ専用新開発大容量ケミコン採用。
- パターン厚 300ミクロンの無酸素銅板ガラスエポキシ基板使用。
- 電子パーツおよびシャーシはすべて非磁性体構造。
- ヒートハイク採用。
- 音質劣化をきたすリレー接点を信号経路に挿入しない3重の保護回路。



アンプは、ブラインドテストでお選びください。

新製品 ¥230,000

DA-100M

全段対アース増幅 純A級モノラルDCパワーアンプ

規格 ● 全段対アース増幅純A級モノラルDCパワーアンプ ● 最大出力/100W(8Ω) A級, AB級両動作とも ● 周波数特性/DG - 2MHz(+0 - -3dB/1W出力時) ● 高調波歪率/0.008%以下(10Hz - 20KHz/0.03W - 100W) ● SN比/155dB以上(入力換算 - 126dB以下) ● 入力レベル・インピーダンス/1.4V(100KΩ) ● 負荷インピーダンス/4Ω以上 ● タンピングファクター/500以上 ● 利得/26dB ● スルーレート/100V/μS ● 消費電力/370W(A級時) 220W(AB級時) ● 寸法/200W × 268H × 433D mm ● 重量15kg